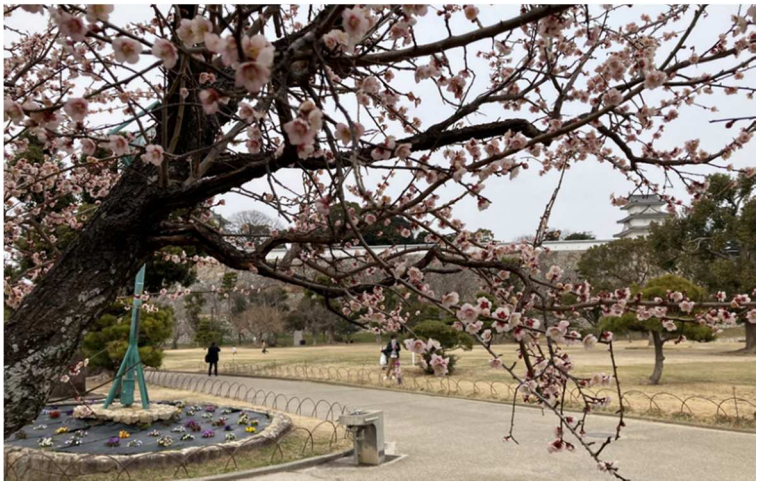
明石の史跡（５２）宝蔵寺の十字架



海門山宝蔵寺（明石市林２丁目）は、れっきとした真言宗の寺院（密蔵院末寺）である。開基は応永年中という。密蔵院が応永２０年（１４１３）孟夏（４月）中旬の建立が伝えられるので、（明石記）、宝蔵寺の創建は、それ以降の応永年中ということになるにもかかわらず、現在の当寺には、十字架が伝存する。そのあたりの事情を考えてみたい。

天正１３年（１５８５）閏８月、秀吉のおこなった人事異動－高山右近という著名なキリシタン大名の明石入部（船上築城）は、当地の人々に複雑な対応を強いることになる。　拒否反応をあからさまに示したのは、僧侶達だった。高槻のおける社寺の破壊というような話を聞いており、その二の舞になるのは避けたいとの強い意向から相談の結果、秀吉の母堂（大政所）と正室（北政所）に、歎願することを決め、仏像を船に積み込んで大阪に向かった。結果は、願いは届かず、持参した仏像も四天王寺預けという、無残なものとなる（フロイス『日本史』／講座明石城史４７６－７頁）。

しかしながら天正１５年（１５８７）３月にはじまる九州遠征。５月８日の島津義久の降伏により終結。６月１９日に、秀吉は宣教師の国外退去を命じた。右近のもとに詰問の使者が到来。翌朝、右近は追放を甘受することを家臣に告げるとともに、明石へも急使を派遣。家族の淡路島への退去を指示する。船上の城下は騒然となる(海老沢有道著『高山右近』１４２－４頁)。キリシタン関係者は、家臣を含めてあわただしく退去せざるをえなかった。寺院には再び僧侶たちの読経の声が響き、残された十字架は、無言の中に激動の一瞬を物語るように思える。

十字架

日本歴史学会会員　茨木　一成